

模倣による発音にみられる母国語の影響

Influence of the Native Language on Imitative Production

付岡 京子*

Kyoko Tsukeoka

序

英語力全般が劣っている場合、せめて発音だけでも上手にさせたいという考え方があるが、テープに録音されたモデルリーディングに合わせてまねて読むという、一見至極簡単そうに思える過程が、いざ実際に学生にやらせてみると、それ程容易ではない事を認識させられる。何故テープのモデルリーディングと掛け離れた読み方になってしまうのか、いいかえれば、何故簡単に模倣ができないのかについて、本学英語音声学 I A・B 両クラスの学生に課したリーディング、および教育実習生の発音指導の際のテープ録音を手掛かりに、考えてみたいと思う。なお A と B とのクラス分けは、入学直後のプレイメントテストによってなされている。

I. 学生に与えた課題

まず、今回英語音声学 I の学生に課したリーディングであるが、研究社の「テープによるアメリカ英語の発音教本」(*American English Pronunciation*) の第 10 課、弱形と短縮形 (Weak Forms and Contracted Forms) の Passage for Reading, および第 11 課、強勢・リズム・抑揚 (Stress, Rhythm and Intona-

tion) の冒頭の会話文を用い、第一回目はモデルリーディングなしに、第二回目はアメリカ人がテープに吹き込んだモデルリーディングをそれぞれ通して聴いた後、初めから自分で読んでテープに録音、提出させた。なお、会話文には絵がついていて、絵からも状況がある程度想像できるようになっている。課題の passage および会話文は末尾に付してあるので、参照されたい。

II. 結果および考察

1. モデルテープの聴取

テープ聴取時の全体を通しての印象は、第一回目と第二回目の読み方の差が期待した程なかったという事、言いかえれば、第一回目と第二回目とほぼ同じ読み方をしていた学生がかなりいたという現実である。その理由としては、まず今回の模倣が文単位の模倣ではなく、全体を通して聴いた後での模倣であった事があげられよう。簡単な短文単位の模倣であれば、反射的にモデルリーディングに倣って発音するという事が可能である場合でも、全体を通して聴いてからの模倣となると、聴覚記憶の保持も困難さを増してくるので、ただ機械的に丸暗記して反復するというわけにはいかず、自分のものとし

てこなして発音する事が要求される。それ故、特に自分のもつ問題点がきちんと整理されていない者にとっては、二回目も初回とほとんど変わらない読みをしてしまうという事になったものと推測される。実際授業中に簡単な短い文章単位の模倣をさせ、マスターデスクからの操作で個々の学生の練習ぶりを聴いてみると、特にAクラスでは、細かい事はともかくとして、全体の流れはかなり良好に反復模倣できている学生が多い。簡単な短文の場合、文字を目で追っただけでは、それはあくまで補助的な手段にすぎず、ほとんど無意識に、いってみれば反射的に、聴いた事を反復しているからであろう。このような場合でも、ちょっと見慣れない単語が出てくると、そこで流れが止まってしまう、リズムが崩れてくる。Bクラスの学生に特にこの傾向が目立ったのは、Aクラスにくらべ、語力が劣っている事によるものと推察される。ましてや文が複雑になり、語いも難しさを増してくると、字面を追うのに精一杯で、文字を追う事に気をとられ、テープの聴取が不充分になってしまうのであろう。見慣れない単語の読み方にばかり注意が注がれ、全体の流れを支配している文強勢、抑揚といったものに注意が向かないため、リズムのない読み方になってしまうものと思われる。特に少し長いものになると、ただ漠然と聴いてしまって、ポイントをおさえていない聴き方になってしまう傾向が顕著である。

その上、ある程度の長さのものになると、たとえ聴いた瞬間には自分の読みとの差を知覚していたとしても、聴き終わる段階までその記憶を保持できないという場合も出てくる。いわゆる聴覚記憶保持の問題が絡んでくる。この場合、子供の頃のように、ただ機械的に聴いた事を何もかも丸暗記しようとしても、無駄な努力に終わる事が多い。ポイントをおさえた聴き方が、聴覚記憶保持という観点からも必要となる。こうみてくると、まず模倣としてのことばの生成の前提条件となる聴き方自体に問題があ

る事がわかる。言いかえれば模倣の場合、表出即ちことばの生成以前の知覚・受容にまでさかのぼって考えなければならぬ場合がかなり多い事が推測される。

2. 単語の読み方

ここで目を転じて、個々の単語の発音に目を向けてみると、全般的には一回目より二回目の方がよかった学生が多かったが、それでも一回目につかえた単語、今回の課題では *severe*, *appetizing*, *finicky* 等が目立ったが、その同じ単語を二回目にも、再びつかえたまま読んでいた者が相当数あった。という事は、ここでも先にふれた聴き方の問題が関与しているわけで、テープを聴く時にただ漠然と聴いてしまって、問題意識をもって聴いていない事が推測される。又、中には英語をローマ字式に読んでしまって、*soup* [su:p] を [soup] と読んでいた学生がいたが、これではスープではなく、石鹸が食卓に出てくる事になってしまう。

ところで、かなり英語力のある者でも、すべての単語を知っているわけではない。知らない単語に出合った場合でも、大抵推測して読んでいくわけで、その事によって全体のリズムを崩さないで済むのだが、一方では逆に、リズムから推測して読める場合もある。*suffering* 等は、たといこの単語を知らなくとも、子音が二つ重なっている直前の母音に強勢をおいて読むという原則にのっとって読めば、正しい発音が可能な単語なのだが、この基本的な知識を持ちあわせていないか、あるいは知識としては知っているが、必要な時に原則が活用できないと、読む時にそこでつかえて、リズムを崩してしまう事になる。

ただ、英語の場合、外国語からの借用語がかなり多いので、読み方に例外が多く、原則通りにはいかない場合がかなりある。又こういった借用語は、英語化されていくにつれ、強勢の位置が英語本来の語に多い前方強勢に移行する傾向がみられるが、その過程に於ては原語の強勢

との併用が生じたり、年月の浅い場合には、通常原語の強勢位置をそのまま保つ事になる。又古典語からの借用語では派生語で強勢が変わるので、より複雑になり、単語だけ取りあげても、英語の発音はかなり厄介である。しかし例外はあくまで例外であって、一応原則にあてはめて推測して読んでみてこそ、モデルテープを聴く時にも、問題意識をもって聴けるようになるものと思われる。

3. 母音の挿入

今回の課題で、単語の発音に関して目立ったもう一つの問題点は、子音の後に不必要な母音が挿入される場合が非常に多いという事である。特に語尾が/t/, /d/の子音で終わる単語にこの傾向が強い。例えば, it, not, but, what, thought, and, food 等の最後の子音の後に、母音の/u/というより実際には日本語の唇のすぼみのない/m/が使われている場合が多いのだが、ともかく母音を挿入して発音するわけで、この母音の付加によって音節が一つふえてしまう。一方英語では逆に、特に語尾の/t/等は脱落する傾向すらある。

ところで Ladefoged は、日本語の五十音をギリシャ、ラテンの mora と呼ばれる単位とみなして分析できるとしている⁽¹⁾。mora は各 mora の発音に要する時間がほぼ同じ、時間を基準とした単位で、日本語の拍と呼ばれる単位とみる事ができよう。ちなみに NHK 「はなしことば講座」では、外国語で用いる音節との混同を避けるために、五十音の一字を音節ではなく、拍の単位として説明している⁽²⁾。ところで日本語の拍の構成をしてみると、母音のア行を除くと、子音プラス母音という組合せになっている事がわかる。逆にいえば、母音プラス子音のように、子音で終わる拍が特殊な場合を除いてないので、日本人の場合、子音で終わる英語の単語にも、つい母音をつけてしまいたくなるのであろう。先の学生の it, not, but の発音は、実際には語尾に母音/u/が付加された事

により、より日本語的な発音に近くなるので、これを Ladefoged のいう mora を単位とした発音表記であらわしてみると、[i t tu], [no t tu], [ba t tu] となり、促音が入っているために、三つの mora から成る語、即ち三拍の語として表される。一語の中に母音は二つしかないが、発音に要する時間は、例えばコトバ [ko to ba] のように、三つの母音を含む単語と変わらないので、促音の場合例外的に、子音だけで一つの mora を形成し得るわけである。

すでにみてきたように、促音等の例外を除き、日本語の場合、原則として子音の後に母音がかかるという音素の組合せに特色があるが、英語では、子音だけが連続して現れる子音結合 (consonant clusters) がみられる。これもまた日本語には普通みられない組合せなので、日本人の場合、これらの子音の間にも母音を入れて発音してしまう事が多い。今回の学生の発音でもこの傾向は顕著で、例えば, string beans の string [striŋ] を [suturingu] と語頭の子音結合の各子音に母音/u/を挿入し、さらに語尾の子音 /ŋ/ の後に再び母音/u/を付加して発音している学生が多い。特に語尾の/ŋ/は日本語的発音になると、後続の母音/u/との間にさらに/g/という軟口蓋破裂音が挿入され易く、従って英語で一音節の単語が、五拍の日本語的発音の語に変わって発音される事になる。

class [klæs] にも、同じような傾向が認められる。この場合は特に、外来語として日本語の中でそのまま使われている単語なので、なおの事、語頭の子音結合の間と語尾に、それぞれ母音/u/を挿入し、強い強勢をおかずに平板に発音してしまっている学生が目立った。この場合さらに、母音/æ/が/a/に、側音/l/が日本語のラ行の弾音としての /r/ に置換され [kurasu] となると、英語というより日本語のクラスとなってしまって、一音節の英語の単語が、三拍の日本語として発音される事になる。

日本語の中で使われている外来語の発音を、

そのまま英語の中にもちこんでしまっているもう一つの典型的な例は, salad である。この単語は, 英語では [sæləd] と第一音節に強勢をおいて発音される。語尾が子音/d/で終わっているので, 母音が付加される場合, 通常 /u/ が使われる事が多いのだが, 実際には /u/ を付加した学生はわずかで, 日本語の中でサラダという表現が使われているためか, /u/ ではなく, /a/ を付け加えた学生が目立った。この場合もただ単に語尾の母音の挿入にとどまらず, それによって [sarada] と第一音節, 第二音節の母音にも変化を生じ, 側音/l/の代わりに日本語のラ行の弾音としての/r/が使われている。さらに第一音節の強勢が消えると, 語のリズムがすっかり日本語的になってしまう。かようにして二音節の英語の単語が, 三拍の日本語として発音されるという現象が出現する。他にも door, letter 等は, 外来語としてそのまま使われる場合がかなり多い。これらの場合もまた, 日本語的発音をそのまま持ち込んでいる学生が目立った。

4. 日本語の音素への置換

ところで, 先にふれた側音/l/の弾音/r/への置換は, 本来日本語にない音を, 聴覚的印象がそれに近い日本語の音素におきかえてしまった例である。O'Connor はその著書 *Better English Pronunciation* の中で, 10歳を過ぎると模倣の力が落ちるので, 大人が外国語, 特にその発音を完全に身につけるのは難しくなると述べているが, その理由として母国語の介入をあげている⁽³⁾。よく日本人は識別, 生成共に英語の/l/と/r/の区別がつかないといわれるが, これは日本語にこの二つの音素の区別がなく, さらに/r/は, 書いた場合には同じ音素記号/r/で表記されているものの, 実際の発音には相異があるためであると思われる。英語の場合, /r/で表される音素は, そり舌の半母音(retroflex /r/)として分類される。もっとも英語の/r/の発音には幅があり, 英音では歯茎摩擦音として分

類される事が多い。これに対し日本語で用いられる/r/は, はじきを伴う弾音(flapped /r/)である。今回のテープは米音によるもので, そり舌の半母音と弾音との比較で考えてみると, 英語の場合は舌先を上歯茎から硬口蓋に向けて巻きあげて近づけるものの, 上顎には触れない。一方日本語の場合は, 舌先が上歯茎に触れたり, 軽くうったりするので, エレクトロパラトグラフにかけてみれば, 舌と上顎の接触の有無がはっきり出る。一方英語の側音/l/は日本語にはない音で, 舌先を上歯茎に押しつけるようにあてがい, 舌の両側から息を出すので, 歯茎側音の名前がある。これ等の相異点を頭に入れて努力すれば, 単音および単語の発音は習得できたとしても, それがちょっと長い文章の中に入ると, 無意識の内に日本語の音素体系の音に変わってしまいがちである。特に聴く場合にはなおの事, 長年その枠組の中で暮してきた日本語の音として聴いてしまう傾向が強くなり, /r/と/l/の識別に困難を感じる日本人は多い。

今回の課題で, sick [sik] を [jik] と読んでいた学生が, かなりの数にのぼるが, これも [si] という音素の組合せが日本語にはないため, 日本語の「シ」[ji] にかえて発音してしまったものであろう。硬口蓋歯茎摩擦音の/ʃ/という音素は英語にもあるが, 厳密には日本語で使われる/ʃ/と全く同じではない。英語の/ʃ/は日本語の/ʃ/にくらべ, 呼気も強く, 唇を突き出して発音する。日本人の場合, 英語の二つの音素/s/と/ʃ/の間の置換というより, 唇を突き出す事なく, 呼気も弱い日本語の音「シ」への置換となっている事が観察される。もっとも最近では若い人の間で, 「シ」[ji]の代わりに「スイ」[si]と発音する人が出てきているとの指摘もあるが⁽⁴⁾, この現象は英語の影響で, 逆に日本語の音素体系にない音が, 日本語の中で使われるようになったものであろう。ともあれ, 英語の/ʃ/と日本語の/ʃ/との間の微妙な差よりも, 英語の/s/と/ʃ/の間の差の方が聴覚的

に大きいので、[sik] を [ʃik] と発音すると、たといそれが日本語で用いられる /ʃ/ であったとしても、聴いている者には sick とは聴き取れない。たまたま英語には、元はフランス語であるが英語として使われるようになっていく chic という単語がある。この単語は [ʃi:k] または [ʃik] と発音されるが、日本語の母音「イ」/i/ は、英語の母音 /i/ よりむしろ /i:/ に近いので、日本人の [ʃik] という発音からは、sick より chic を思い浮かべ易い。たかが音素一つの発音の差で、意味が全く違ってしまふことになる。なお今回の課題には含まれていなかったが、日本人が同じように [ʃik] と発音してしまいがちな英語の単語に、thick [θik] がある。この舌歯摩擦音の /θ/ という音は、音素そのものが日本語にない音なので、注意を要する。これらの例からもわかるように、英語では /s/, /ʃ/, /θ/ の違いだけで意味が全く違う単語となる。使用頻度も高い音素なので、この三つの音を注意して発音しわけるだけでも、発音全体の印象がかなり違ってくる。なおこの事は、この三つの無声音にそれぞれ対応する有声音 /z/, /ʒ/, /ð/ についてもいえる事である。

ところで、無声音 /s/ に日本語では [si] という音連結がないように、/s/ に対応する有声音 /z/ にも [zi] という音連結はない。課題の会話文に出てくる appetizing [æpetaiʒiŋ] は、読み方にとまどった学生が多かった単語の一つであるが、原文に強勢記号がついていたにもかかわらず、第一音節の強勢が消えてリズムが日本語的になり、前述の string の場合と同様に、語尾に [gu] という音が付加され、さらに [zi] という日本語にない音連結を日本語の「ジ」[ʒi] にかえてしまう傾向が認められた。ちなみに日本語の「ジ」は通常 [dʒi] と表記されるが、実際には語中では [ʒi] と発音され易い。

他に今回の課題の中で学生の発音に問題があった音素として、father, beef, food, very 等に含まれる唇歯摩擦音 /f/ およびその有声音

/v/ をあげる事ができよう。/f/ も /v/ もこれまた日本語の音素体系にはない音なので、この音に近い日本語の両唇摩擦音 [ɸ]⁽⁵⁾、および両唇破裂音 /b/ にそれぞれかえて発音しているものが多い。[ɸ] は声門摩擦音 /h/ の異音で、日本語の直音では「フ」[ɸu] の組合せにのみ現れるが、外来語の発音で「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」[ɸa], [ɸi], [ɸe], [ɸo] と使われる。その影響であろうか、今回の課題でも father [fa:ðər] が [ɸa:za:] となったり、beef [bi:f] が [bi:ɸu] に、又 food [fu:d] も [ɸu:du] となってしまう者がかなり目立った。さらに有声音の場合も very [veri] を [beri] にかえて発音する傾向がみられた。即ち上歯を下唇につけるべきところを、調音点が近いせいか両唇を使った音の似ている日本語の音にかえてしまっているのである。

ところで上にあげた例をみると、ただ単なる子音の置換にとどまらず、母音にも変化が生じている事がわかる。ここで母音の変化について、もう少し詳しくみてみたい。日本語には /a//i//u//e//o/ の五つの母音しかないのに対し、英語には、分類の仕方によって音素の数に違いはあるが、少なくとも日本語の倍以上の母音がある。それ故、似通った日本語の母音にかえて発音しようとするれば、英語では異なった母音も、同じ母音として発音される事になる。上の例の father で使われている二つの異なった母音 /a:/ と /ər/, および前出の class [klæs] や salad [sæləd] に使われている /æ/ や /ə/ も、日本語的発音だとすべて「ア」/a/ またはその「ア」を単に2倍に引き伸ばした長母音「アー」/a:/ となってしまうのである。本学でも発音記号を使わず、テキストに日本語で読み仮名をふっている学生が特に B クラスに目立つが、仮名ふりをしているだけでは正しい発音を習得できない事は、この事からも明らかであろう。

/i/ に関しても、実際は日本語と英語では違った音なのに、同じ音素記号を用いているだけに、注意を要する。日本語の母音「イー」

[i:] は長母音で、短母音「イ」/i/の長さの二倍の二拍として数えられるが、英語の母音/i:/は/i/とは異なる音素であって、長さの差によって区別されているわけではない。ちなみに英語の/i/は日本語の「イ」と「エ」の中間位の音であり、/i:/の場合は日本語の「イ」よりも舌の緊張が強い。その上英語には、日本人にとって/i:/および/i/とまぎらわしい硬口蓋半母音の/j/がある。日本語のヤ行に使われている音であるが、[ji] および [je] の音連結は日本語にはないので、日本人にとっては [ji], [je] と単独母音/i/, /e/との区別が難しい。受け答えの Yes [jes] が [ies] となってしまうたりするのは、このためであろう。

英語では前方母音の/i:/と/i/が、単なる長さの違いではなく、別の音素である事はすでにみてきたが、後方母音の/u:/と/u/に関しても同様の事がいえる。この二つの異なった音素/u:/と/u/は、共に唇を丸めて発音する rounded vowel に分類されているが、/u:/の場合は特に唇の緊張が強い。一方日本語の「ウ」は唇のすぼみを伴わない音であり、別の/w/という表記が使われているように⁽⁶⁾、英語の/u:/や/u/とは違う音である。もっとも英語でも/u/に関しては、Ladefoged が、Many speakers have a very unrounded vowel in "good" ...⁽⁷⁾と述べているように、現在ではそれ程唇を丸めないで発音する傾向がある。しかし日本人の場合、英語の/u:/を発音する時にも、日本語の「ウ」をのばして代用しがちなので、唇をしっかりと丸めて緊張させて発音するよう、注意が必要である。さらに/u:/や/u/の前に両唇半母音の/w/がつく時は、唇を充分丸めて突き出すように気をつけねばならない。日本語にも/w/という音素はあるが、英語にくらべ、唇の緊張もずっと弱い上、「ワ」[wa] という組合せでのみ使われるので、半母音/w/を母音の/u/、さらには往々にして日本語の母音/w/にまでおきかえて発音してしまう事が多い。今回の課題でも、week [wi:k] が [ui:k] またはさらに [ui:ku] に

なったり、we [wi:] を [ui] または [uii] に、would [wəd] を [ud] にかえて読んでいた学生がかなり目立った。なお we には上記の強形の発音の他に、弱形の [wi] という発音があり、would は強形では [wud] となるが、弱形の場合、上記の発音の他に [əd] 更には [d] が用いられる事もある。なお上記の課題に用いた表記は、筆者が文脈から強形、弱形の選択をし、テープのモデルリーディングと照合して記したものである。

5. 母音の長さ

強形、弱形の問題は後にもう少し詳しくみる事にして、ここでは母音の長さについて少し考えてみたいと思う。すでにみてきたように、日本語は長母音と短母音の対比のある典型的な言語の一つである。日本語の場合原則として、五十音で表される一文字が一拍の単位で、これが直音と呼ばれるものであるが、子音と母音の間に半母音がはさまって作られる拗音は、二文字で一拍と数えられる。一拍の発音に要する時間はそれぞれほぼ同じで、これが短母音である。引き伸ばす時は2倍に引き伸ばされるので、0.5倍とか、1.5倍等の長さになる事はない。つまり「アー」等にみられる引き伸ばし記号「ー」も一拍とみなすわけで、これが長母音で二拍と数えられる。

これに対し英語では、時に長母音、短母音という表現が使われる事はあっても、/i:/と/i/, /u:/と/u/の所でふれたように、長さによる差異というよりは、音質の差によって自然に引き伸ばされる結果になるにすぎない。隣接音の影響によっては、/i:/と/i/, /u:/と/u/でほとんど長さが変わらない場合がある。この隣接音の影響による一般的な傾向としては、do [du:], day [dei] のように、後続音がない場合は長く発音される。また有声子音の前に来た場合は、無声子音の前に来た場合より母音は長く発音される。例えば、今回の課題に出てくる believe [bəli:v] の/i:/と、その名詞形 belief

[bɒli:f] の/i:/をくらべると、同じ表記/i:/で表されてはいるものの、実際には母音の長さは前者の方が長い。さらには John Lyons が *Language and Linguistics* の中で、seat [sit] と sit [sit] の母音の長さをくらべて、… the vowel segment of seat is phonetically shorter than that of either seed or see. Indeed it can be shorter in its phonetic realization, than that of the phonologically short vowel of sit.⁽⁸⁾と述べているように、逆に/i:/の方が/i/よりも短く発音される事すらある。Ladefoged も、In most varieties of English, variations in lengths are completely allophonic.⁽⁹⁾と述べている。その他強勢によっても母音の長さは違って来るし、文中ではリズムの影響も受ける。今回の課題に出てきた father [fá:ðər] の第一音節の母音/a:/は、母音そのものが口を大きく開く開母音である上、有声子音の前にあるので、長目に発音されるのが、英語としては自然である。その上ここに強勢がおかれるので、聴いた時の印象は第一音節が大きく浮き出て、第二音節は影が薄くなる。ところが日本語の場合、特定の所を強める事なく、各拍ほぼ同じ長さで発音する習慣がある事から、英語の発音でも強勢をおこななかったり、又たとい強勢をおいても不十分だったりするため、母音が短めに聞こえ、リズムが不自然になり易い。今回の課題の学生の発音でも、この傾向が目立った。

6. 語強勢と文強勢

ところですでにみてきたように、日本人の場合、不必要な母音を挿入して発音する傾向が強い。毎年教育実習に出る前には、実習生はかなり発音に力を入れて練習するが、何回もテープを聴いて相当練習を積んだ学生の場合でも、母音をさしはさむ癖はなかなか抜けない。教育実習の場合、中学校の教科書を使うので、語いが難しいわけではなく、その上学生は細かく調べて勉強してくるので、単語が読めないという事はまずない。一応は読んでいるのだが、どこか

英語らしく聞こえない場合がある。簡単な単語でありながら、ある実習生が何度練習を繰り返しても、なかなか英語らしいリズムで発音できなかった単語に next があった。この単語は [nekst] と語尾に子音が三つ連結して終わる一音節の単語である。日本語にはない子音結合があるので、語いとしては簡単でも、発音という観点からすると、そう易しくはない。案の定学生は、この三つの子音のそれぞれの後に、予想どおり母音/w/をさしはさんただけでなく、[nekusutu] と日本語のリズムで一拍一拍、等間隔に読んでいたのである。実際は日本語でも、母音が無声子音にはさまれた場合、無声化する事があるのだが、時間は同じだけとるため、等間隔に聞こえる。母音をさしはさまないように何度注意しても、なかなか直らない。原因はむしろ強勢に注意を払わない事にあつたと思われる。強勢をおくと逆に強勢のない所の母音は弱くなったり、省略されたりするので、自然に母音が抜けてくるのである。その結果、英語らしいリズムの発音となってくる。Ladefoged も、English and other Germanic languages make far more use of differences in stress than do most of the languages of the world.⁽¹⁰⁾と述べているように、英語に於て強勢の果す役割は大きい。

ここで英語の強勢の特徴について、もう少し詳しくみてみたい。今回の課題にはたまたま含まれていないが、英語には動詞と名詞と同じ綴字のものがかなりある。しかし大抵の場合は強勢の位置が違ふし、その事によって母音も変わってくる。例えば protest は名詞では [próutest] と第一音節に強勢がある。ところが動詞になると [prətést] と第二音節に強勢が移る。この強制の移動により、名詞の第一音節の/ou/という母音が、動詞では/ə/という母音に変わっている。また subject を例にとってみても、名詞では [sábdʒikt] と強勢のある第一音節には/ʌ/という母音が使われ、弱強制の第二音節には/i/という母音が使われている。

ところが動詞になると [səbdʒékt] と第二音節に強勢が移り、それに伴って第二音節の母音が/e/にかわり、一方第一音節の母音は/a/に変わる。

この事は、一音節からなる単語にもいえる事で、強勢の強さによって母音が変わり、品詞の違いを表したり、同じ品詞でも強形、弱形の別を表したりする。一音節の場合は単語としては強勢記号をつけないのが普通であるが、強形では強勢をおいて発音される。例えば、that [ðæt] と強形で発音すれば、指示詞として使われる場合であるし、一方 [ðət] と弱形で発音すれば、連結詞として使われているという事になる。今回の課題に含まれている do を例にとると、強形では [du:] と発音されるが、弱形では [du] または [də] と発音される。次に have をみても、強形では [hæv], 弱形では [həv] または [əv], さらに [v] のみで発音される事もある。これらの例からわかるように、弱形になると母音があいまい母音化してくる。つまり弱形で使われる母音は、弱母音の/a/と/i/が多い。また子音にも変化を生じ、声門摩擦音の/h/が脱落する傾向がある。英語の語強勢や文強勢のある音の発音に於ては、一時的に呼気圧が上昇する事が知られているが⁽¹¹⁾、発音の際のエネルギーの大半は強音節にとられてしまい、弱音節ではわずかに残ったエネルギーで発音する事になるので、強勢による強弱の差が大きい。

ところで、それぞれの単語がもっている語強勢は辞書に出ているが、実際に文中で使われる場合には、強勢の位置が往々にして変動してくる。それ故辞書に出ている強勢を絶対不動のものとして、そのみ頼りにする事は非常に危険である。五十嵐がいうように、語強勢は静止しているにすぎず、それが文中に入ると動き始めるのである⁽¹²⁾。

文強勢の原則を Daniel Jones は次のように述べている。

As a general rule it may be said that the relative stress of the words in a sequence depends on their relative importance. The more important a word is, the stronger is its stress. The most important words are usually (in the absence of special emphasis) the nouns, adjectives, demonstrative and interrogative pronouns, principal verbs, and adverbs. Such words are therefore generally strongly stressed.⁽¹³⁾

つまり文章の中で重要な意味をもった単語、即ち一般に内容語と呼ばれる名詞、形容詞、指示詞、疑問詞、動詞、副詞等に文強勢がおかれるのが原則である。という事は一方、通常機能語に分類される冠詞、前置詞、接続詞、助動詞、それに代名詞等には、原則として強勢はおかないという事を意味する。まずこの原則を学生がどの程度心得ているかをみるために、前出の *American English Pronunciation* 第11課の exercise を用い、テープを聴く前にどこに文強勢がかかるのか予想させ、強勢記号をつけさせてみた。中には強勢の意味がわからず、ほとんど強勢記号をつけずに提出した学生もいたが、大部分の学生はかなり正しく予想できていた。とはいえ副詞と動詞に強勢記号が抜けていた学生が多く、逆に綴りがちょっと長目であるためか、前置詞 among に強勢記号をつけてしまった学生が目立った。また ran off with it to his kennel の with it to his は、強勢のかからない四つの単語が一まとまりの弱強勢として発音されるのだが、語数が多いためか、代名詞 it にかかりの学生が強勢記号をつけていた。

Jones も前出の引用でふれているように、上にあげた原則には勿論例外がある。書いた場合には全く同じ文でも、特定の所を強調したい時には、その箇所を強勢をおいて発音すれば、異なったニュアンスを表現できる。このような場合には、普通は強勢のかからない代名詞等にも強勢をおいて発音する事がある。いわゆる強調

による強勢の移動である。その他対照を際立たせようとする時にも、対比されている所には、品詞の如何を問わず強勢がおかれる。その際対比をより一層明白にするために、その単語本来の語強勢まで変動させる事がある。つまり辞書に記されている通りに発音されない場合がでてくる。

また助動詞は機能語に入るので、普通は弱強勢であるが、文尾にくる時や、付加疑問文に用いられる場合、および否定短縮形の場合は強勢がおかれるので、母音も強形をとり、長目に発音される。アメリカ英語では、can [kæn] と can't [kæn(t)] の区別がつきにくいとよくいわれるが、これは自然の速度で話されると、否定短縮形 [kænt] の語尾の子音/t/が脱落するので、同じような発音になってしまうためである。しかし実際には/t/の音は消えても、その音が入っていた時間的空間はそのまま残る上、母音/æ/が肯定の時より、強く長くその上ピッチも高めに発音されるので、ここが識別のポイントになるといわれている⁽¹⁴⁾。

これまでは弱強勢が強勢にかわる例をみてきたわけであるが、内容語であっても、同じ単語がくり返し出てくる場合、つまり既出語については、二回目以降は通常既出語には文強勢はおかない。聴き手の方で想像がつくからであろう。例えば、exercise として学生に与えた例文の母子の会話の中で、Is it raining? と母親がきいているのに娘が答えて、“No,” I said, “It looks like rain, but it isn't raining actually.” という科白があるが、rain も raining も共に文中で重要な意味をもっている内容語である。しかし最初の rain には文強勢がおかれるが、raining の方はすでに rain が使われているため強勢はおかず、文強勢のある否定短縮形の isn't の次にくる文強勢は、末尾の副詞 actually である。

ここで今回の課題の学生の発音を、文強勢の観点から、原則に照らしてみたい。Did you have a letter from his father last week?

という問に対して、Yes, I did, but I thought he would be back at school by this time. と答えるくんだり Passage for Reading にある。この答えの文には did と would と二つの助動詞が使われているが、綴字の長さからくる文字の印象故か、むしろ would の方に強勢をおき、did は軽く読んでいる学生が目立った。しかしこの答の文は、but でつながれた重文で、did は前半の文の終わりに来ているので強勢がおかれるのに対し、逆に would は前後関係から考えて、特に強調する理由もないので、強勢をおくとそこが浮き出て、不自然にきこえる。又会話文の最後の We can't afford beef every day, can we? に出てくる否定短縮形の can't の強勢が不十分で、母音の長さが短めのため、英語らしいリズムの読みができていない学生が、かなり多かった。母音を弱目に発音し、否定の語尾/t/にこだわると、語尾に母音が付加され易く、平板なりズムになってしまうためであろう。

7. 英語のリズムの特徴

このように強勢は英語のリズムに大きく関与し、重要な意味をもっているが、ここで英語のリズムの特徴について考えてみたい。Borden と Harris はその共著 *Speech Science Primer* の中で、発音の韻律的な面は、文の内容と重複して出てくる現象であって、文の抑揚とか強勢は、通常内容的ないい間違いとは独立に、正しく保たれている事が多いと述べ、さらに日本語やフランス語と対比して、英語は強勢がタイミング設定に重要な役割をもつストレス型の言語であり、強勢がほぼ一定の間隔でおかれるようになっているので、聴き手はこのリズムを一種の手掛かりにして、話の内容を理解すると述べている⁽¹⁵⁾。又 Ladefoged も次のように述べている。

As a rule English tries to avoid having stresses too close together....Stresses tend

to recur at regular intervals. It would be quite untrue to say that there is always an equal interval between stresses in English. It is just that English has a number of processes that act together to maintain the rhythm.⁽¹⁶⁾

英語でも強音節が二つ、三つと続く事が現実にはおこっているが、原則として英語は、強音節が隣り合わせる事を嫌う性格をもっているという事である。それ故、強音節が時間的にほぼ等間隔に出てくるというのが、英語のリズムの特徴となる。普通はこのリズムの方が優先する傾向があるので、文章の支配下に入ると、前述の文強勢の原則に変動をきたす事が出てくる。つまりリズムのために、内容的に重要な意味をもつ単語が弱強勢になったり、その単語本来の強勢に変動を生じたりする。丁寧に辞書をひいて調べてきた教育実習生がよくとまどうのだが、Japanese という単語を辞書でひくと、[dʒæpəniːz] と最終音節に第一強勢がおかれている。ところが文中で a Japanese car という句として使われる場合、モデルテープを聴くと、第一音節に強勢がおかれている。これは最終音節に強勢のくる単語のすぐ後に、第一音節に強勢のくる単語が続いた場合、強音節が続いてしまうので、それを避けるため、リズムの関係で、最初の語の Japanese の強勢が第一音節に移行したためである。-teen で終わる数詞に関しても、She is just eighteen. では、第一強勢は [eɪtɪːn] と第二音節におかれるが、She is eighteen years old. では、後続の years と強音節が続く事をさけて、第一音節に強勢が移行する。

英語では、単語自体が語強勢をもっているだけでなく、文中では文強勢が時間的にほぼ等しい間隔をおいて現れる。一方日本語では、文字がふえればそれに比例して、発音に要する時間も増す。これに対し英語では、長い綴りの単語が短い綴りの単語より、発音に時間がかかるわ

けではない。つまり音節数に比例して、発音に要する時間がふえるわけではない。又単語の数がふえるにつれ、文を読むのに要する時間がふえるわけでもない。読むのに要する時間は、強音節の数が目安となる。強勢と強勢の間の時間を、できるだけ均一にしようとする傾向があるので、たとえ音節数がふえても、単語の数がふえても、弱強勢の場合は、できるだけまとめて弱く速く発音して、時間的均衡を保とうとするわけである。逆に強音節が続かざるを得ない時は、弱音節がない分だけ間をとり、長目に発音される。Gimson が a second language is often learned on a basis of isolate word forms; in the speech of the native, however, the outline of these words will frequently be modified or obscured, ...⁽¹⁷⁾ といみじくも指摘しているように、外国語の発音の場合、一つ一つの単語を正しくはっきり発音しようとして、逆にリズムを崩してしまっている事が多い。いってみれば、ちょうど日本語で文字を覚えたての子供が、一字一字拾い読みしているようなものであろう。いくら一つ一つの発音に気をつけて読んでも、これでは自分にも言っている事の意味がわかりにくいし、ましてや聴いている相手が理解しにくいのは当然であろう。

聴き手に理解してもらうためには、少なくとも最小の意味の区切りである意味語群は、つなげて言う事が必要である。ちなみにディクテーションでゆっくり読みきかせる時にも、一語一語ではなく、意味語群単位で区切るのが普通である。ところでいくつかの単語をまとめていう時、つながりを自然にするために、いわゆるリエゾンと呼ばれる「音の連鎖」、同じ音または似た子音同士の間接の際、前の語の最終音が発音されない「音の脱落」、そして隣接音の影響で別の音にかわる「音の同化」といった現象がおきる。母音で始まる語を前の語の語尾の子音とつなげて発音するリエゾンの現象は、今回の課題にもみられるが、What can I do for you? の can I がその一例としてあげられよう。もし

子音/n/で終わる can と母音ではじまる I をつなげて [kænai] と読まず、それぞれの単語単位で独立させて読むと、ボキボキと途切れた感じに聞こえ、自然のリズムが出ない。exercise(2)に出てくる once upon a time, in a small village 等でも、それぞれの単語を独立に読んでいた学生が非常に多いが、文の区切りがはっきりしなくなるだけでなく、流れが感じられず、不自然さが目立った。音の脱落の例としては、exercise (1)の ran off with it to his kennel の it to [it(t)ə] があげられよう。この現象は破裂音におき易いのだが、破裂音 (plosive sound) は別名閉止音 (stop sound) とも呼ばれる。つまり閉止に続く破裂の過程をとって発音されるためである。特に無声音の場合は、語尾にくると破裂しないで終わるので、連結がおき易く、二音が一音のように発音される。しかし前の音から後の音へと移行する際、ごくわずかな休止が入る事で、二語がつながっている事が無意識の中にわかるといわれている。音の同化の例としては、課題の中の Didn't you have a letter...? に出てくる didn't you [didntʃu:] をみてみたい。後の語 you [ju:] の最初の半母音 /j/ が前の語の語尾の無声子音 /t/ の影響で /t/ と合体し、無声破擦音 /tʃ/ となって発音される現象で、このように発音すると、いかにも英語らしい自然のつながりが感じられる。有声音についても同じ事がいえるので、肯定形の did you も [didʒu:] と発音される。自然の速度で話される時は、このような現象が随所に出てきて、英語らしい響をつくりあげている。Gimson も外国人学習者への忠告として、次のように述べている。

The foreign learner need not attempt to reproduce in his speech all the special context forms of words... He must, however, observe the rules concerning weak forms, should cultivate the correct variations of word rhythmic patterns according to the

context and should make a proper use of liaison forms.⁽¹⁸⁾

一つ一つの音素や単語の発音はどうでもいいというわけではないが、とりわけ弱形やリエゾンの使用には注意を払い、文脈にそくした英語らしいリズムの習得に努めないと、生きた英語は身につかないという事であろう。

8. 区切りと抑揚との絡み

英語のリズムは強勢が核になっている事はすでにみてきたが、それだけで形作られるわけではなく、それに音調の変化による抑揚が絡みあって、感情や含蓄等も表すのである。語順は平叙文でも、文の終わりを上昇調にすれば、軽い疑問文になるように、抑揚は音声表現に於て、むしろ構文より大きな役割を果す場合がかなり多い。機能語は弱く速く発音され、聞こえにくいので、強勢のおかれる部分の抑揚の変化が、聴き手に強い印象として残るからであろう。又同じ文でも抑揚によって、違った意味の伝達内容となり得る事も知られている。上昇、下降いずれもとり得る附加疑問文 (tag question) の場合も、上昇調にすれば、はっきりしないのできいてみようという気持が強い事を表すし、下降調にすれば、わかっているが一応きいてみようというニュアンスが強い。抑揚は細かい感情のあやや心理状態を表現できるだけに、言語による差というより、会話が交わされる状況や、話し手と聴き手との関係等を反映し、個人差も加わって非常に複雑である。本稿では学生の課題の読みを通して、文強勢と区切りとの関係に於て、リズムの一要素としての抑揚のごく基本的な用法の注意点にのみ、ふれる事とする。

強勢と抑揚は本来別のものであるが、密接な関係をもっていて、強勢がおかれると自然に声も高くなる事が多い。しかし強勢はあっても音調はあがらない事がある。モデルテープを聴いてみると、intonation の exercise (1) に出てくる疑問文 Is it raining? の場合、強勢は rain-

ingの第一音節におかれるが、上昇調になるのは第二音節からであるし、その前の疑問文What's the weather like, Jane?の疑問詞whatには強勢はあるが、声の調子は高くなっていない。

基本的には疑問文の時は、文の終わりが上昇調になるが、疑問文でも疑問詞のある時は、下降調になるのが普通である。疑問詞で始まる疑問文で、なおかつ上昇調で終わる場合は、親しみを表すといわれている。一方平叙文は通常下降調で終わる。平叙文が上昇調で終わる時は未完を意味し、気持の上でまだ続いているという含みを感じられる場合である。下降調は終結を意味するので、文の途中で下降調になると、聴き手はそこで終わるものと期待してしまう。逆に途中の区切りで上昇調にすれば、まだ続いている事が聴き手に伝わる。それ故単語にしても、句にしても、並列で並べる場合、途中の区切りではそれぞれ上昇調にし、最後を下降調にする。音声言語で意味の区切りを表現しようとする時、時間的な休止である間とあわせて、大きな役割を果すのが抑揚である。例えば課題の会話文で、Sandyが夕食のメニューをきかれたのに答えて、Corn soup, lamb chops with french fries and string beans, and salad. とメニューを並べている科白がある。この内lamb chops with french fries and string beansは、絵からもわかるように一皿にもってあるのだが、モデルテープを聴くと、区切りごとの間と上昇の程度によって、聴き手にそれが伝わり、最後のsaladの所で下降調になる事で、メニューはそれで終わりという事を聴き手は了解する。しかしここまで細かく気を配って読んでいた学生は皆無に近く、並列の区切りの上昇もなく、ただ平坦に一語一語読んでしまった学生も、かなりの数にのぼった。

次にPassage for Readingに出てくる“Come in,” said Mr. Jones, and Mr. Brown, the principal entered the classroom. をみてみたい。Mr. Jonesの次にcommaがあるので、

文字をみれば倒置形の動詞saidの主語となるのはMr. Jones一人であって、Mr. Brownは次のthe principalと同格で、後続の動詞enteredの主語になっている事は明らかである。音声表現の場合、一本調子にずるずるとつなげて読んでしまうと、聴いている者には意味がとりにくい。もしMr. Jonesの直後のcommaの所よりも、Mr. Brownの後に来たcommaの所で、より時間をとった区切り方をすると、聴き手は“Come in”といったのはMr. JonesとMr. Brownで、別の名前の校長が他にいて、その校長が入って来たかと思ってしまう可能性がある。特にMr. Brownを下降調にすると、なおその傾向が強い。正しく意味を伝えるためには、Mr. Jonesの後の区切りを意識して間をとり、文の途中なので、軽い上昇調で終える。and以下は新しい文の始まりとして、同格の部分をMr. Brown, the principalとつなげるように、抑揚もBrownの所で上昇調にし、そのまま高い調子をthe principalの第一音節まで保ち、第二音節でいったん下降させ、再び上昇させると、聴き手に、“Come in”といったのはMr. Jonesであり、ついで校長のMr. Brownが教室に入って来たのだという意味が、明瞭に伝わる。

読み手の側になつと、意味がわかって読んでいるのかどうか、それがはっきり現れるのが、句、節、文、相互間の中断、休止等いわゆる区切りと抑揚で、入学後のプレイメントテストでクラス分けしている本学のA・B両クラスの差が、上にあげた例を含め、この点で予想以上にはっきり出ていた。intonationのexercise (1)の所でも、Is it raining? という疑問文をIt is raining. と下降調の平叙文に読み違えていた学生がかなり目立ったが、前後関係を考えずに読んでいたためであろう。テープを聴いての模倣にも、内容の理解は欠かせない。また前後関係によって、同じ文でも強調したい所が違って来るし、演説と普通の会話文では、当然区切り方も違うのである。テンポも違って来る。しか

しいずれの場合でも、音声言語に不可欠なのはリズムであろう。どこの国の言語にも、その言語特有のリズムがある。今回の課題でも、英語のリズムにのって読んでいる学生は、発音も概して良好である。教室でしか英語に接する事なく、リズムをつかもうとしても無理な話で、できるだけ機会を求めて、かなりの量をきかないと、リズムはなかなか会得できない。英語のリズムをつかんで読んでいた学生にきいてみると、ラジオやテレビ、カセット等を利用して、できるだけ英語を聴く機会を持つと努力している。まず沢山きいて、日本語とは根本的に違う英語のリズムに慣れる事が、音声言語を学ぶ場合に不可欠な模倣に上達する第一歩である。

III. まとめ

音声言語の習得は、耳で聴いてそれを模倣する事から始まる。一見簡単そうな模倣が、何故簡単にできないのかを検討し、模倣にも実は聴き方、内容の理解等総合的な英語力が関係している事、特に年齢が進んでいる場合は、長年親しんできた母国語の介入が大きく係わっている事をみてきた。

発音には個人差があり、母国語に関しても厳密に言えば、各人が全く同じように発音しているわけではない。しかし一定の許容範囲内でないと、その言語として受け入れられないわけで、弁別特性の一定の枠の中で発音した場合のみ、聴き手に理解され、受け入れられる。それ故、日本語にない音素の発音には、充分注意を払わねばならない事はいうまでもない。しかしそれにも増して重要な事は、日本語とは違う英語特有のリズムを会得する事である。英語は強勢が軸となっている言語である。一つ一つの音素を正確に単語単位で一本調子に読むのではなく、区切りや文強勢の位置に注意を払い、強勢のある所を強く発音するだけでなく、強勢のない所は、音節の数にとらわれず、まとめて弱く速く発音する事が、英語らしいリズムを作り出す基となる。このように強弱の差をはっきり

出す習慣をつける事によって、日本語の影響による不必要な母音の挿入も防げるし、ひいては流れのある英語として通じる発音につながるものと考える。

注

- (1) Peter Ladefoged, *A Course in Phonetics*, Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1982, p. 226.
- (2) NHKアナウンス室, 『NHKはなしことば講座』, 1986年4月～9月, p. 24.
- (3) G. D. O'Connor, *Better English Pronunciation*, 成美堂, 1966, pp. 1-3.
- (4) NHKアナウンス室, op. cit., p. 47.
- (5) [Φ]の代わりに大文字の[F]の表記を用いる場合もある。
- (6) 日本語でも英語と同じ/u/の表記が使われる場合もあるが、本稿では音質の違いをはっきりさせるため、/u/の表記を用いた。
- (7) Ladefoged, op. cit., p. 76.
- (8) John Lyons, *Language and Linguistics*, Cambridge University Press, 1981, p. 95.
- (9) Ladefoged, op. cit., p. 225.
- (10) Ibid., p. 224.
- (11) 澤島政行, 「音声産出のしくみ」, 『講座言語障害治療教育』, 総説II, 第二章, 福村出版, 1982, p. 46.
- (12) 五十嵐新次郎, *English - Its Vocal Expression*, 南雲堂, 1981, p. 190.
- (13) Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics*, Cambridge University Press, 1918, p. 262.
- (14) Paul Snowden & Tsukasa Matsui, *Listening for Yourself*, 朝日出版, 1988, pp. 15-16.
- (15) Gloria J. Borden & Katherine S. Harris, 廣瀬肇訳, 『ことばの科学入門』 (*Speech Science Primer*), MRC メディカルリサーチセンター, 1984, pp. 142-143.
- (16) Ladefoged, op. cit., p. 109.
- (17) A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronun-*

ciation of English, Edward Arnold, 1980, p. (18) Ibid.
297.

資料

Passage for Reading

During the class on geography, there was a knock on the door. "Come in," said Mr. Jones, and Mr. Brown, the principal, entered the classroom. "What can I do for you?" said Mr. Jones. "I'm looking for Jack. Is he here today?" said Mr. Brown. "He belongs in II A, doesn't he?" "Yes, he is a member of my class, but he's absent from school for over a week." "He's been sick, hasn't he?" "Yes, I believe he's been suffering from a severe cold. Didn't you have a letter from his father last week?" "Yes, I did, but I thought he would be back at school by this time."

Conversation

A: What are we having for dinner, Sandy?

B: Corn soup, lamb chops with French fries and string beans, and salad.

A: That doesn't sound very appetizing, does it?

B: Oh, don't be too finicky about your food, Bob.

A: I'm not, really. Only, I'm a bit fed up with lamb.

B: I know, but we can't afford beef every day, can we?



Exercise

1. Mark stressed syllables with '.

- (1) A dog once stole a piece of meat out of a butcher's shop and ran off with it to his kennel.
- (2) Once upon a time, there lived a wicked old woman in a small village among the mountains.

2. Indicate intonation with lines as shown in the above examples.

- (1) "What's the weather like, Jane? Is it raining?" asked Mother.
- (2) "No," I said, "It looks like rain, but it isn't raining actually."